

事実・虚構・理由—規範的理由とフィクションのパズル

高田敦史 (Atsushi Takada)

所属なし

この発表では、鑑賞者の感情や反応の規範的理由とフィクションの中の虚構的な事実の関係を問題にする。ここで注目するのは、誤った信念は規範的理由を与えないが、虚構的事実は規範的理由を与えるという違いである。この発表では、この違いがどこからくるのかを説明する。またそれによって、事実のみが規範的理由を与えるという広く浸透した立場に異議を唱える。

理由に関しては、しばしば説明的理由(または動機づけ理由)と規範的理由が区別される。説明的理由は行為・感情・信念がなぜ生じたのかを説明し、一方規範的理由は、行為・感情・信念を正当化し、当該の行為・感情・信念に賛同を与える。

規範的理由の特徴として、誤った信念は規範的理由を与えないという現象がしばしば持ち出される。例えば、ある人が空腹であり、リンゴを与えられたとしよう。行為者は知らないが、このリンゴには毒が入っている。こうした誤信念のケースでは、リンゴを食べる行為には信念によって説明的理由が与えられるが、規範的理由は与えられない。さらに、こうした事例に基づいて、規範的理由を与えるのは事実だけであるという見解が擁護されることが多いが、本発表は小説や映画などフィクションの事例を考察することでこれに疑問を提示する。

まず、上記の誤信念のケースと近い現象はフィクションに関しても起こりうる。例えば、ストーリーの前半では、あるキャラクターが親切な人物として描かれるが、後半でそれらの優しい外面が偽りのものであったことが明らかになるという物語を考えよう。ある鑑賞者は、前半に接することでこのキャラクターを尊敬するが、後半で知った情報により、尊敬を撤回する。こうした場合でも、虚構的事実に基づいて考えれば、鑑賞者にははじめからこのキャラクターを尊敬する規範的理由はなかったとすることができるだろう。

ところが、虚構的事実は事実ではないため、こうした事例で、事実が規範的理由を与えているとは言えない。フィクションの哲学における標準的分析によれば、虚構的事実は、「フィクションにおいて」というプレフィックス付きの文で表現されるような事実であるか、メイクビリーブという特殊な心的態度であるとされる(Walton(1990))。いずれの立場をとったとしても、虚構的事実は、行為者の信念に、関連する点でよく似ている。

例として「シャーロック・ホームズは鋭い知性をもっているため、ホームズを尊敬する理由がある」といった事例を考えよう。ここでは、一見すると〈シャーロック・ホームズは鋭い知性をもっている〉という虚構的事実が規範的理由を与えているように見える。しかし標準的分析では、虚構的事実は〈フィクションにおいて、シャーロック・ホームズは鋭い知性をもっている〉というフィクションに関する事実であると見なされる。しかし一般に、Pがある行為や感情の理由を与えるとしても、〈フィクションにおいて、P〉が現実の行為や感情に理由を与えるとはかぎらない。さらに、〈フィクションにおいて、P〉と〈信念において、P〉は関連する点でよく似ているため、前者が規範的理由を与え、後者が規範的理由を与えないとすればそれはなぜなのかが説明されなければならない。メイクビリーブのような心的態度を導入しても、それだけでは信念との違いは説明できない。

本発表では、このパズルに対する解決の一つとして、Kolodny, MacFarlane の意味論的相対主義に基づく説明を提案する (Kolodny & MacFarlane(2010)),

MacFarlane(2014))。意味論的相対主義に基づく義務様相の意味論、およびそれに対応する理由観では、理由を与えるのは、事実ではなく、理由帰属の真偽を査定する査定者が持っている情報であるとされる。これまでこの立場には、不確定情報のもとの理由の帰属に関して利点があることが提案されてきた。本発表では、この立場が上記のようなフィクションの事例に関しても良い説明を与えることを指摘する。意味論的相対主義では、虚構的事実の事例と誤信念ケースの違いは、査定者が参照する情報によって説明される。誤信念ケースの場合、ケースを検討する査定者は行為者の誤信念を共有していない。一方、虚構的事実のケースの場合、査定者は行為者のメイクビリーブを共有している。メイクビリーブを共有する査定者は、規範的理由の帰属に適切に同意することができるが、誤信念のケースではこれは成り立たない。このように、意味論的相対主義の分析では、ケースを検討する査定者が参照する情報に訴えることで、信念とメイクビリーブの違いを説明できる。

参考文献

- Kolodny, Niko & MacFarlane, John (2010). Ifs and Oughts. *Journal of Philosophy* 107 (3):115-143.
- MacFarlane, John (2014). *Assessment Sensitivity: Relative Truth and its Applications*. Oxford University Press.
- Walton, Kendall L. (1990). *Mimesis as Make-Believe: On the Foundations of the Representational Arts*. Harvard University Press.